

★★周旋家日記 27★★

「シティズンシップについて考える」 ④一高校生の探究学習

乾明紀

1. はじめに

最近、高校に関連する仕事が増えました（写真）。その中でも多いのが「探究学習」に関するもので、今回はそれについて書いてみようと思います。



高校における探究学習指導の様子

2. 探究学習

文科省（2018）¹が示す探究学習（探究的な学習）とは、図1に示された「①課題設定」「②情報の収集」「③整理分析」「④まとめ・表現」という探究の過程を経る学習やその過程を繰り返す学習のことを指す。

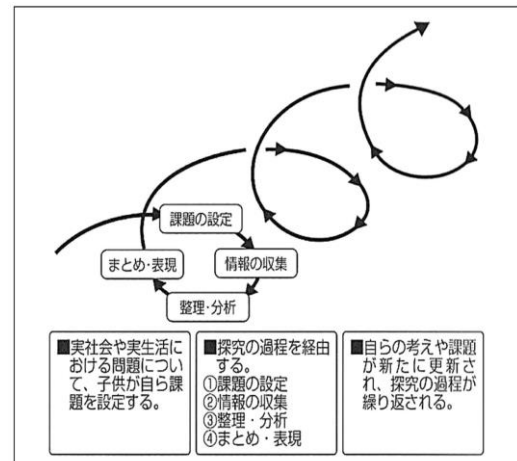


図1 探究的な学習における生徒の学習の姿
（文部科学省,2018）

この探究学習を文科省が推進する背景には、わが国の将来が「厳しい挑戦の時代」とあるとの未来予想がある。少子高齢化や生産労働人口の減少、グローバル化や人工知能（AI）の進化などにより社会は大きく変化しようとしている。様々な事象が複雑に絡み合いながら急速に変化する社会の先行きは非常に不透明である。このような「厳しい挑戦の時代」を生きるためには、社会の課題に向き合い、自らの力でそれを切り開いていくことが生涯に渡って求められる。その能力・資質を育成するのがこの探究学習なのである。

2018年、高校の学習指導要領が改訂（2022年実施）され、それまでの「総合的な学習の時間」（以下「総学」）は、「総合的な探究の時間」に改められた。これは、小中学校に比べ高校の探究学習が低調だったため、必修化することでその充実を目指してものである。

なお、「総合的な探究の時間」の目標は以下であるが、「総学」での探究が自己の生き方を考えていくためのきっかけであったのに対し、「総合的な探究の時間」は自己の在り方・生き方と一体的で不

¹ 文部科学省（2018）「高等学校学習指導

要領解説 総合的な探究の時間編」

可分な課題を探究することが目標になっている。

【総合的な探究の時間の目標】

探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。

(2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。

(3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

2. 探究学習の課題

蒲生（2017）²は、「探究学習」は官制の枠組みであり、確立された学習理論でない点が大きな課題だと指摘する。文科省が推進する探究学習の依拠する学習理論が不明確であるため現場を混乱させているという。

現場の混乱については、筆者にも経験がある。それは、理系と文系で探究学習に抱くイメージが違うのである。SSH（スーパーサイエンスハイスクール）などで行われている理系の探究学習は、仮説検証型であり、単純化すれば「①課題設定」「②仮説生成」「③仮説検証（調査・実験）」「④まとめ・表現」がプロセスとなる。また、理系の探究学

習は、理科教育から発展したという経緯もあり、教科教育と連携しながらその応用的学習ととして実践しやすい性質がある。

一方、SGH（スーパーグローバルハイスクール）などの文系の探究学習は、定まった方法はなく手探り状態であるといえる。その理由のひとつとして、社会問題を探究テーマ（課題）に設定することが上げられる。生徒にとって身近な社会問題を課題にすることは、自己の在り方・生き方を考える機会にもなり好ましいことであるが、テーマが大きくなりすぎてしまい単なる「調べ学習」で終わる場合もある。また、不十分な知識を基に安易な課題解決案を提案・発表して終わる場合も少なくない。これは、高校生にとって、設定するテーマ（課題）に対する前提知識の収集が容易ではないことを示している。なぜならば、様々な事象が複雑に絡み合った社会課題を探究テーマにする際には、教科科目での学びが前提知識として活かしにくいからである。ここが理系の探究学習と異なる点である。つまり、文系の探究学習は、前提知識の収集に時間がかかり、そこで時間切れになるのである。

また、グループで探究活動が行われていることも探究を難しくさせていると言える。グループは、生徒の興味関心に基づき最大公約数的に結成される。他者との協働探究は異なる視点や価値に触れるという利点がある一方で、問題意識が拡散しすぎて問いが収斂していかないという問題を生じさせる。

3. 「総合的な探究の時間」の充実に向けて

これらを踏まえ、「総合的な探究の時間」を実質化するためには、学校内で探究学習のイメージをすり合わせるところから始める必要があろう。筆者はそのためにある高校の教員研修会で、図2を提

² 蒲生 諒太（2017）「探究的な学習」をめぐる諸課題：一理論・実践双方からの検討一、日本

示した。これは川喜多二郎（1967）³が示した異なる3つの研究アプローチである。

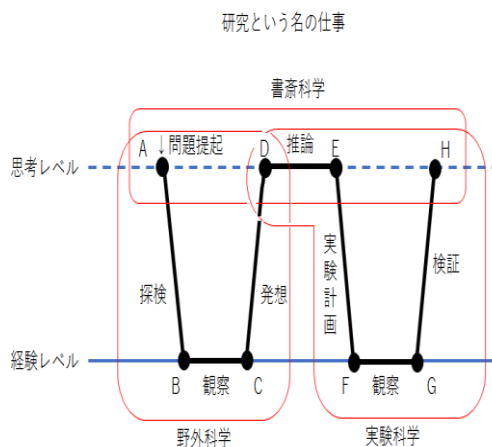


図2 W型問題解決モデル（川喜多,1967）

3つの研究アプローチとは、文献を中心に研究する「書斎科学」、フィールドワークで得た情報をKJ法などで考察する「野外科学」、実験により仮説を検証する「実験科学」ある。

生徒にどこまでさせるのか、どのように探究させるのかは十分な事前のすり合わせが必要であろう。筆者がアドバイスをおこなったある高校では、図2で示す「野外科学」のみを探究学習の対象とし、仮説生成までとした。ここまででも文科省が提示する探究過程（図1）を経ており、「総合的な探究の時間」の教育目標に到達することができる。

また、問題が収斂しにくいという課題に対しては、教員側が枠組みを設定するのもよいだろう。後藤ら（2014）⁴が紹介する中央大学杉並高校の探究学習（「探究マップ」）では、生徒が課題を設定する際には、YES・NOで回答することができ

ることを仮説にするという“縛り”を設けている。このようにすれば、過度の拡散を防ぐことができ、YESかNOの根拠となる情報を収集しながら結論に至ることが可能となる。筆者が実践しているシテイズンシップ教育（乾,2017）⁵はこれと同様の発想だ。

「総合的な探究の時間」は、様々な可能性を秘めた科目である。しかしそれ故に混乱の可能性もあることは既に指摘したとおりである。この科目での学びが「這い回る経験主義」と批判されないためにも高校現場には万全な準備をもって2022年を迎えてもらいたい。もっとも、そのためには教員の過度な負担を減らしたり、探究環境を整えたりするための国や教育委員会の支援が不可欠であることも付記しておこう。

日記は続く

³ 川喜多二郎（1967）『発想法』中公新書

⁴ 後藤芳文・伊藤史織・登本洋子（2014）『学びの技 14歳からの探究・論文・プレゼンテーション』玉川大学出版部

⁵ 乾明紀・高野拓樹（2018）論争的問題を

導入した主権者教育の試み－2016年度 京都光華女子大学初年次必修科目「シテイズンシップ」の取り組み－. 京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要（55）11-20